

中<sup>5)</sup>の「沖の波音近きは雨の兆」「川瀬の音が川下から聞えると雨」というのがある。

さて、藤原咲平<sup>6)</sup>の集めた「気笛の音の大きいのは雨近し(和歌山)」と同じような「汽車の音がすると雨になる」というものが、広島県賀茂郡の一地方にあるので報告する。

広島県賀茂郡に住む当年55才になる農業主婦の方から手紙をもらい、表題にあるようないい伝えを教えられた。地図から住所を調べてみると、国鉄の線路に一番近い直距離は、山陽本線本郷、河内駅の中ほどから5~6kmの谷間であった。

この手紙には、関連して笑話が付いてある。第2次大戦中、食糧増産について「汽車の音が聞こえたら雨が近いから、イモズル(さつまいもの苗)を切って植えるように」という講演があった。さて、あるおじいさんが汽車に乗ろうと駅のプラットホームで待っていると「ありゃ、汽車の音がしたんけん、早うイモズルを植えにゃー」といった。

このあたりに鉄道が敷かれたのを調べてみると、1892年(明治25年)7月に山陽鉄道株式会社の山陽鉄道が糸崎まで付き、広島まで開通したのは1894年6月というから、第2次大戦までの約50年ぐらゐの間にこのいい

伝えが生まれたことになる。

いわゆる文明開化してからできたいい伝えに「三人で写真を撮ると真ん中のものが死ぬ」というのがあり、文部省の迷信調査では北海道から九州まで、全国的なものという、これは汽車の音と性質が全く違うが、ことわざ発生からきょう味がある。気象学のほかに歴史学、民俗学、人類学、社会学、言語学、地理学、宗教学、心理学などの知識を総合して研究しなければならない問題である。

#### 参考文献

- 1) 岡田武松(1935): 気象学, 岩波書店, 第1版, 下巻, 202~212.
- 2) 北海道庁第2部地理課(1890): 北海道俚諺天気予考, 北海道庁発行, p. 59., 67.
- 3) 愛知県名古屋測候所(1901): 尾三気象俚諺, 14~15, 34~35 [1961年, 中部電力K. K. 給電部系統技術課の復版による]
- 4) 高山測候所(1924): 飛驒の天気俚諺, 気象集誌, 2nd, 2, 252~253.
- 5) 田口克敏(1959): 気象のことわざ, 財団法人関西気象協会発行, 117~119.
- 6) 藤原咲平(1961): 天気俚諺集, 気象庁研修所発行通信教育部テキスト第11分冊, 天気予報と暴風警報, 気象学概論付録, 61~77.

#### 〔新書紹介〕

大気の謎をとく O・G・サットン著 村山信彦訳  
B 6版 254頁 白揚社発行 定価 480円

微気象や拡散問題の大家として知られているイギリス気象局長のO・G・サットンが、一般教養のための気象学書として、1961年にあらわした“The Challenge of the Atmosphere”の完訳である。

第1章の「気候と天気」では、地球全体の熱エネルギーの収支をあつかい、第2章以下への導入部分になっている。第2章は大循環がテーマで、大気力学の法則が述べられ、熱学に関係のある法則は、第3章の「雲と雨の物理」で説明されている。ここでは、人工降雨についても、かなりのページがさかされている。

第4章は高低気圧規模の現象で、絶対零度の保存則が中心になり、予報の経験則が力学理論によりどのように裏付けられるかが述べられる。ハリケーン、トルネード、雷雨が次の章であるが、現象のスケールからみて、ハリケーンは高低気圧のほうに含めるのが適当ではなからうか。危険半円が進行方向の右側でなく、北側の半分になっている図は適当でない。半径1kmの雷雲の全エネルギーが、第二次大戦中に日本に落された原爆の10倍もあるという説明は興味深い。

さらに小さい規模の現象として、第6章に乱流理論の

歴史的発展とその意義が、第7章にその応用がとりあげられる。ラグランジュ相関と「よっぱらいの歩き方」のアナロジーはおもしろく、乱流理論の実用性を「気象学の人類福祉のためにはたす偉大な貢献の一つは、大気中の不必要な物質を除去する方法を、しっかりした物理的基礎に立って解決すること」としているのは、著者の微気象に対する端的な評価である。

第8章は「天気予報の進歩」で、予報の限界や適中率の意味、長期予報の基礎としての周期や類似性、数値予報の発展とテクニクについて述べている。

この種の啓蒙書はすくない。しかし、現在の気象学の中心問題を、大気現象のスケールを横軸とし、エネルギーの原理を縦軸として位置づけしようとする著者の着眼点には新鮮さがあり、しかもその意図はかなり成功しているように思う。気象学を羅列的・横断的に修得した人々が、もう一度著者の立場で見なおすことは大変意味のあることで、また、気象技術の実際に従事する人達が、その技術分野の位置づけをはっきりさせるためにも、本書の一読はプラスするところが多いにちがいない。

訳は、原文えの忠実さを第一としているため、すらすら読みとおしにくいところも見うけられるが、他の教科書などを一応読んだ人なら、困難なく理解できると思う。本書の中に日本の資料を織りこめば、ユニークな気象学入門書となるにちがいない。(篠原武次)